

2021年12月18日奉神礼基礎講座

Slide 表紙

みなさんこんにちは。正教聖歌「お名前」シリーズの第2回。コンダクです。

Slide 1

コンダク、辞書的に言えば、「小讃詞。ギリシア語でコンタキオン。単節のトロパリを20から30節も連ねた長い複合詩で、6世紀頃盛んに作られた。代表的作者は聖歌者と讃えられるロマン（ロマノス・メロドス）。7世紀に新しい形式「カノン」に取って代われ、短縮されて、早課のカノン第6歌頌の後、時課、聖体礼儀のトロパリの後に歌われるのみとなった。

となりますが、これでは全然ピンときませんね。今日はみなさんが一番馴染みのコンダク「降誕祭のコンダク」を例に挙げてお話しします。

Slide 3

コンダクは6世紀頃盛んに作られました。6世紀というと西のローマ帝国はすでに滅ぼされましたが、東の帝国はユスティニアヌス帝の絶頂期、ハギア・ソフィア大聖堂が建てられ、壮大な儀式が行われました。

これは生神女庇護祭のイコンですが、同じ日に聖歌者ロマンが記憶されるので、生神女の下の方に描かれています。コンダクはハギア・ソフィアなどの大聖堂で歌われました。

拡大すると

Slide 4

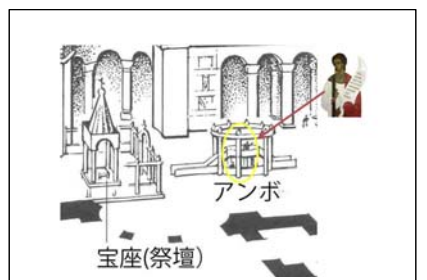
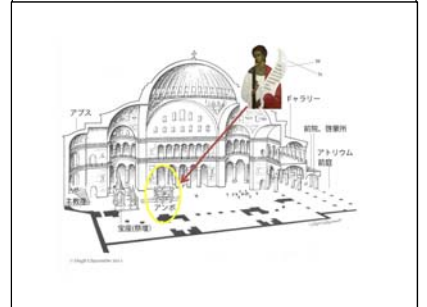
巻物を持って、壇の上に立っています。聖歌者だいたい巻物を持っています。この階段のついた段は「アンボ」、日本語では「上の壇」と書いて「升壇」といいます。

Slide 5

アンボは主教が祝福する壇、説教を行う説教壇でした。至聖所の正面、今だと中央のアナロイのあたりにおかれていました。コンダクは特別に指名された人が特別の服を着て歌いました。

Slide 6

拡大するとこんな感じです。ユスティニアヌス帝のころのハギア・ソフィアには司祭60人、輔祭、40人、副輔祭、90人誦経者110人、聖歌者25人いたという記録があります。さぞかし豪華な儀式が行われていたでしょう。



Slide 7

これはナジアンザスのグレゴリイ主教が祝福しているところ。升壇外の祝文は主教がこの壇を降りて退出するときの祈りでした。今はそのあとまた至聖所に戻りますが、昔は「終わりですよ。平安にして出ずべし」と行って、そのまま退出したので、升壇外の祝文でした。

Slide 8

こちらは主教、金ロイオアンがアンボンの上から説教し、皇后エウドクシアを糾弾している絵です。西洋絵画なので、西洋風の説教壇に描かれていますが、階段の上です。

Slide 9

アンボは後に、西方では左右に移動されて、説教壇になりました。ヨーロッパの聖堂前方の柱のあたりに立派な説教壇があるのをご覧になったことありませんか。ギリシアでも左脇にこういう壇があって、使徒経が読まれているのを見かけました。たしかに聖堂の真ん中にあんなに大きな壇があったら邪魔でしょう。

Slide 10

では聖歌者ロマンについてお話ししましょう。ロマンは5世紀後半の生まれ、シリア出身のユダヤ人で、正教に改宗しました。ベイルートで輔祭になったとされ、555年よりあとにコンスタンティノープルで没したとされます。

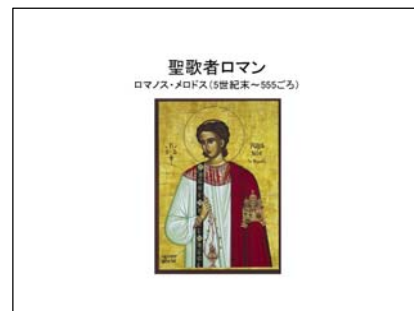
Slide 11

聖人伝では、ハギア・ソフィア大聖堂で堂役、あるいは誦経者をしていましたが、田舎出で無学であったためにほかの奉仕者から馬鹿にされていました。降誕祭の前日、ロマンが泣いて寝入っていると生神女が現れ、巻物を食べさせました。翌日、彼はアンボの上でクリスマスのコンダクを美しく歌い、人々を驚嘆させたと伝えられます。巻物を食べさせられたと言う話は他にもあって、神の聖神を受けて、歌を作ったことが表されています。イコンもそうですが、正教においては聖歌は自己表現ではなく、神のメッセージ、教会の共通理解を表します。

Slide 12

今はコンダクはトロパリとかわらない短い詩ですが、当時のコンダクは短いトロパリを20から30も連ねて、テーマを発展させた、長い物語歌、物語説教でした。

ロマンが作った降誕祭のコンダクを例に挙げて説明しましょう。後に省略されてしまったので、今の祈祷書には最初の二節しか残っていませんが、こういう本が出ていて、ロマン作とされるコンダク 50

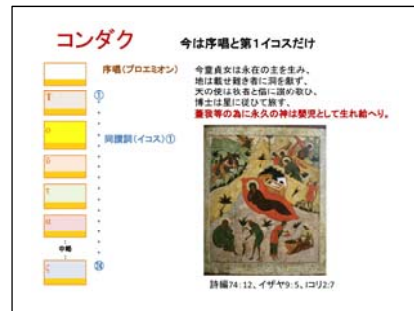


編が、日本語に訳されています。

Slide13

昔のコンダクでは最初にプロエミオンと呼ばれる序唱を歌います。このプロエミオン序唱の部分が、今コンダクと言われている「今、処女は」の歌です。オペラの序曲のように、降誕物語の全体を要約しています。処女が永久の神を生み、地は出産の場として洞窟を指しだし、天使は羊飼いと讃美し、博士は星に導かれて旅した。最後の行「蓋我等の為に永久の神は嬰兒として生れ給へり」は聖歌隊クロスがリードして、会衆全体で歌いました。

そして、今のイコス（同讃詞）から24連のコンダクが始まります。24連すべて、最後の行は「蓋我等の為に永久の神は嬰兒として生れ給へり」で、「神が人となったこと、藉身、受肉、の神秘を表明する部分はとくに大切だから、繰り返し歌って、教義を信徒全員、教会全体で共有する仕組みになっています。ちなみに、ロマンの頃はコンダクという名称は用いられておらず、単に「エノスさんび」とか「オーデ、歌」とか呼ばれていました。



Slide14

第1番イコスを見てみましょう。

①ベツレヘムはエデンの園を再び開いた。さあ行こう。私たちは隠れた場所に歓喜を見つけた。さあ、洞窟へ行こう。楽園のさいわいを受けに。そこではゆるしを生む根が現れ、掘られていない井戸が見つかった。ダビデは昔その水を飲もうとした。(歴代上 11:17-18) そこで処女が子を産み、アダムとダビデの乾きをいやした。だからそこへエデンの園への立ち帰り、罪の赦しの始まりであることが歌われています。



最後の行は「蓋我等のために永久の神、嬰兒として生まれ給えり（私たちのために永遠の神が赤子として生まれたから）。です。この「蓋し我等のために・・・」は24番すべて、最終行は同じリフレインです。

Slide15

次、2番と3番は生神女マリアが赤ちゃんのハリストスに語りかけます

「どうして私に種を蒔かれたのですか？なぜ生まれてきたのですか？なぜ私は処女のままなのですか？」また、

「天の創造主なのに、なぜ粗末な場所、洞窟で、飼葉おけの中にあるのですか」



Slide16

4番から、3人の博士たちが登場し、生神女と博士たちの会話で物語が進みます。

④マリアは博士に向かって尋ねます。

「あなたがたは誰ですか」

博士「このような方を生まれたあなたは誰ですか？父は誰ですか？私たちは星を見て知ったのです。」

5番では、博士は「ヤコブから一つの星が出る（民数 23:23、24:15-17）」というバラムによる預言がかなったこと語り、マリアはこれを聴いて、赤子に伏拝し、涙を流します。

マリアは博士を招き入れます。

Slide17

10番からマリアと博士の会話が続きます。

博士たちは救世主を見て、畏れに震えます。またイオシフがそこにいることに驚いて、尋ねると、マリアはイオシフが天使から告げられたことを説明します。

Slide 18

あらためてマリアは「あなたたちはどこから、どうやってきたか？」と尋ねます

博士たちはカルデア人の地、バビロンから星に導かれてきたこと、預言を調べてエルサレムを探し回ったこと、ヘロデに問われたけれど、真実を隠して、来たことなどを語ります。

Slide19

21番、博士は贈りものを差し出し、天使から聖三の歌を受けたように受けとってくださいと願います。

22番、マリアは贈りものを見て、受けとらせくださいとハリストスに願います。

「憐れみ深い救主よ、三つの願いを聞いてください」

すべてのものを和解させてください。

③あなたがわたしから生まれたことをみなに知らせてください。

Slide20

最後のイコス全文を続けて読んでみます。

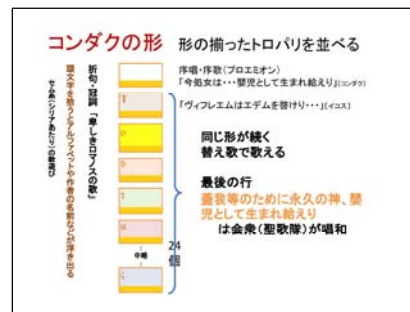
救世主よ、世を救ってください。そのためにおいでになったのですから。すべての業を修復してください、そのために光を放っておられるのですから。あなたはわたしと博士たちと、すべての被造物の前で光を放っています。ほら、あなたの顔の光は博士たちに現れ、彼らは跪いて、有用で立派な大変珍しい供え物をあなたに捧げます。わたしにとってそれらは有用だからです。あなたのためにエジプト



に逃げなければならないからです。我が子よ、私の案内者、創造者、裕福にする方よ、最後に蓋我等のために永久の神、嬰兒として生まれ給えり（新しく生まれた幼子、永遠の昔からの神が）。
というドラマ仕立てになっていました。

Slide21

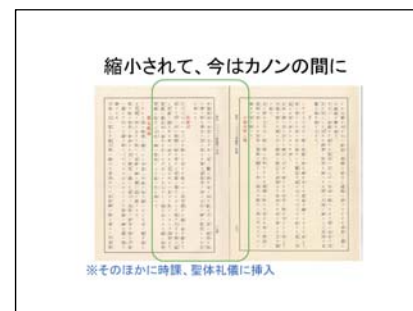
詩の形から見ると、24 個の詩が連なっていますが、ギリシア語原文ではすべて同じ形に揃っていたので、容易に「替え歌」で歌えました。長い詩なので、多分、棒読みのように歌っただろうと推測されています。最後のフレーズはすべて同じで「蓋、我等のために永久の神、嬰兒として生まれ給えり」会衆が歌って参加しました。



さらに、詩の遊びがあって、それぞれの節の最初の文字を拾うと、「卑しきロマノスの歌」という文字があぶり出されます。これは折句、アクロスティクというユダヤやシリアといったセム系の詩のことば遊びで、ギリシアの祈祷書には今でも赤字で書かれていて、縦読みするのだそうです。カノンにもあって、日本正教会では「冠詞」と訳されて書かれていますが、日本語に訳してしまうと意味のないもので、附唱と混同されています。私もずっと附唱のことだと思っていました。

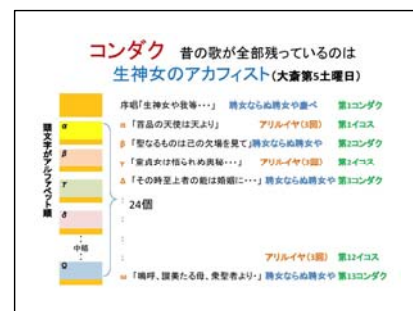
Slide22

7世紀になると聖歌の中心が修道院、特にパレスティナの聖サワ修道院に移り、民衆受けのするドラマティックな「物語風」コンダクよりも、聖書に重点を置いた「カノン」が好まれ、コンダクは序唱のプロエミオンと第一イコスだけに縮小され、カノンの第3歌頌のあと、第6歌頌の後に、かつての序唱がコンダク呼ばれ、第一イコスだけが残りました。



Slide23

昔のコンダクが今も省略されずに行われているのは、唯一、大斎第5週の土曜日の「生神女のアカフィスト」です。これはロマンの作品ではないとされますが、24 節からなるコンダクが早課の中に分散されて歌われます。序唱、プロエミオンは「生神女や我等〜」、繰り返しのリフレインは、交互に「聘女ならぬ聘女や慶べ」と「ア rilイヤ、ア rilイヤア rilイヤ」。やはり折句、冠詞がついていて、24 節の頭文字を並べると、ギリシアのアルファベットが現れます。最初は「天使は」で始まっているから、「アングロス」の α ですね。さまざまなたとえを用いて生神女を讃える美しいお祈りです。是非、参拝されることをオススメします。正教国では、このコンダクの部分だけを取り出して、生神女のアカフィストとして単独で行うこともよくあります。



Slide24

降誕祭のコンダクに話を戻します。「今処女は」はブルガリア調ボルトニャンスキー編曲のもの「今処女は」が広く歌われていますが、コンダクは八調のメロディで歌うこともできます。八調のメロディはトロパリと共通です。一昔前は3調で歌われていたそうです。ですから他の祭日でコンダクの楽譜がない場合は、トロパリと同じメロディをあてはめればOKです。

調のメロディとしては
トロパリ共通

たとえば 降誕祭のコンダク 3調

処女はいま 赤子の王を産む 慈ほの世がたきものに
ほらを産す 天のつかい牧者とともにほめうたひ
はかばは星にしたがてたびすゝる けだしわれらの
ために永久のかみみどりごととして生まる

Slide25

お名前シリーズの次はカノン、修道院の聖歌を2月にお送りします。

奉神礼基礎講座、次回1月は実習編で、「奉神礼の流れと選曲—領聖前に何を歌うか」を考えています。Zoom講座は15日です。

オンライン奉神礼基礎講座、実習編

お名前の聖歌を知ろう

正教聖歌の伝統

第6回 聖歌の「お名前」の由来2

コンダク—6世紀の物語説教

講師 ヤマハ 結島純子